

青丘文庫研究会 月報

No.254

2011年6月1日

青丘文庫研究会 〒657-0064 神戸市灘区山田町3-1-1 (財)神戸学生青年センター内
TEL 078-851-2760 FAX 078-821-5878 <http://ksyc.jp/sb/> e-mail hida@ksyc.jp
①在日朝鮮人運動史研究会関西支部 (代表・飛田雄一)
②朝鮮近現代史研究会 (代表・水野直樹)
郵便振替<00970-0-68837 青丘文庫月報>年間購読料3000円
※ 他に、青丘文庫に寄付する図書の購入費として2000円/年をお願いします。

<巻頭エッセー>

金慶海先生を偲んで

坂本悠一



本紙第200号(2008年10月)以来約2年半ぶりに、本欄に登場させていただく。該号で「うつ病」(最近「鬱病」の文字も使用可)をカミング・アウトしたところ、「私も」、あるいは「私の連れ合いも」という、メールを数人の方からいただき、薬についての情報など、いろいろとご教示をいただいた。この場をお借りして、改めてお礼申し上げる。さて、年賀状を差し上げている方は、先刻ご承知の通り、2009年8月より「休職」となり、大学の研究室や小倉のアパートも引き払って、高槻の自宅に撤退した。ところが、翌10年春頃より、ある本に接したことが契機となって俄然研究意欲が湧き、躁状態かと思われるほど資料収集に駆け回り、いくつかの研究会でも報告ができるほど回復した。ただ、4月の「在日」研究会で報告したように、突然「キョンチャル・アパート」にのめり込むなど、精神状態は依然として不安定であり、大学での講義はとても無理だろうと判断して、停年をまたずこの8月には退職することに意を決した。今後は「市井の研究者」として、細々と研究を続けていくつもりである。

前置きが長くなってしまったが、この「市井の研究者」の立場で、営々と研究活動を続けて来られた金慶海先生が逝去されたのは2009年12月6日のことだった。もう1年半にもなると、先生の姿の見えない「青丘文庫研究会」も「日常化」しつつあるようだ。実は昨10年1月31日の「偲ぶ会」には、原稿代わりのメモを準備していたのだが、余りにも発言者が多く、機会を与えられなかった。そこで、今回は先生との生前のおつきあいの一端を披瀝して、追悼の意を表したい。

さて、私が先生に初めてお目にかかった日時は確たる記録がないので、特定できないのだが、おそらく1990年以降毎年連続して開催されていた「強制連行研究集会」のいずれかの大会においてではなかったかと思われる。そして私が金英達の誘いで「青丘文庫研究会」に初出席することになっていたのは1995年1月22日の予定であったのだが、その5日前の17日に発生した震災によって流会となった。そのため、私が先生と研究会で初めて同席したのは、同年5月21日に再開された研究会でということになる。しかし、それより2ヶ月前の3月7日、私は先生が確か住吉近辺の仮設の避難住宅にまだ住んでおられた時に、いわゆる労務動員「厚生省名簿」のコピーを拝借しに高槻の自宅から車でお訪ねした。これが個人的接触の初めであった。先生は当時住居のすぐ近くのパチンコ店で働いておられ、その店で呼び出してもらって、自宅に保管されていた段ボール3箱位をお借りして帰った。そのときの印象は、先生のような知識人が働くのには似付かわしくない職場だなあということとともに、店内のもうもうたる紫煙に閉口したのであったが、ヘビースモーカーの先生にとっては、似付かわしい職場であったのかもしれない。

その後、青丘文庫研究会には皆勤出席の先生とは、私が数ヶ月ごとに出る毎に顔を合わせていたが、飲会ではその紫煙を避けてできるだけ離れた席に座るのが習慣となっていた。研究会以外で同道したのは、

2005年8月に釜山で開かれた「韓日民族問題学会」の大会と、翌06年8月済州島で開かれた「強制連行交流集会」がある。後者は同月3日～7日にわたり、シンポジウム・フィールドワークの強行軍であったが、何日か日付は特定できないが、確か朝天面付近で、偶然先生の両親の生家が廃屋となっている場所を案内された。その廃墟を見て私は日本の「故郷の廃屋」という歌を連想するほどの衝撃を受けたのである。ちなみに、私が「トッケビ道路」でバスに置きぼりにされたというすでに伝説化した事件は、7日のハルラ山登山の帰路であったが、先生は登山には参加されなかったように思う。翌8日は別々にソウルまで飛んで、夜は「(略称)親日究明委員会」のメンバー達を加えて、先生も私も「ノレパン」ではしゃいだ楽しい思い出が記憶にある。

さて以上は、「厚生省名簿」の件を除いて、皆さん方も見聞を共にされた出来事であるが、せっかくの機会なので、あまり知られていないと思われる「秘話」を紹介しておこう。時間は少し前後するが、先生は、2006年の1月21日～27日と2月6日～11日、それぞれ1週間にわたって北九州に資料収集にお越しになっている。目的は戦前の1982年から1938年まで門司で発行されていた『門司新報』の記事を収集するためである。本紙は「石炭新聞」の異名をもつ実業地方紙で、朝鮮にも近いことから、朝鮮関係記事が豊富である。私はきっと朴泳孝関係の記事がお目当てであろうと予想していた。ところが、予想に反してなんと創刊から1910年の韓国併合までの朝鮮関係記事を全部集めるのだという。これはなんとかお手伝いしたいものと思案した。まず宿泊であるが、私の2Kのアパートの1室は完全に物置状態で、残り1室も布団1組を敷くだけのスペースしかない。先生もそれは期待されていなかったようで、小倉駅近くの安いホテルを予約してこられた。それで、とにかく夕食だけは夜間の授業のある日を除いてご馳走しようとした。そして僭越ではあるが複写費用も私の研究費でまかないましようとして申し出た。ただし、コピーを2部して1部は私がもらうという条件付、なんのことはない、先生を労働力として利用するという訳である。

問題は複写方法で、実は私の大学には、北九州市立中央図書館に所蔵されている原紙を撮影したマイクロフィルムと、これをさらにプリントアウトして製本したものの両者が所蔵されている。私は当然のごとく後者のハードコピー版の利用をお勧めしたのであるが(私も以前在日朝鮮人関係記事を収集した際にこちらを利用した)、①A3版に縮小されているため字が小さいこと、2ヶ月分ずつ製本されているためコピーするには重たいことを理由に断られ(コピーは学生のアルバイトにやらせますからと進言したのであるが)、「僕はマイクロの方が使い慣れているからね」と、結局目を酷使するリーダープリンターに朝から晩までかじりついて仕事を開始された。ところがである、1台しかない貧乏大学の機械には、とてつもない量のコピーに耐えるトナーが補充されておらず、数日後にトナー切れとなってしまった。予算の関係もあって即時補給とはいかず、やむなく北九州市立中央図書館のマイクロを利用してもらうことになった。同館は小倉のホテルからも近いところにあり、交通費も不要、料金も本学と同じ1枚10円なので、問題ないと思ったのであるが、2台あるリーダープリンターは相当酷使されており、濃淡の調整などに相当苦心されたようであった。そこで、2月に来られる時までには、図書館事務長と交渉してなんとかトナーを購入してもらったが、市立図書館の機械の方が使い慣れたのか、本学の方はあまり利用されなかった。ちなみに、先生が収集された新聞は、すでに青丘文庫に搬入されているはずであるが、その手を余分に煩わしたコピー1部は私の自宅にある。優に1000枚は超えるコレクションであるが、今の私にはもう無用の長物である。送料さえ負担いただければ、早い者勝ちでお譲りします。

さて、夕食は私の行きつけの店3軒を順番に回るような段取りであったが、1軒の韓国料理店で先生が私に隠れて勘定を払われたことがあった。ニューカマーの日本人妻アジュマの営む店で、味は抜群であるがメニューに値段が書かれていないという店で、まもなく閉店してしまった。後で、先生曰く「ノム ピサヨ」「独身貴族の大学の先生は違うなあ」と。もうひとつ、1月21日に小倉に到着するやいなや、「小林知子ちゃんを呼んで、ここから近いんやろ」との命令、彼女は当時大学の法人化問題で多忙と聞いてい

たし、福岡からは新幹線で片道 2050 円かかるが、先生の厳命とあらば仕方ない。早速翌晩駆けつけてくれて、河豚料理の後、カラオケで終電までつきあってくれた。上記「偲ぶ会」の時、この話が出て、「あの時は楽しかったね」と二人して頷きあったことであった。

さらに余談であるが、先生の兄弟姉妹も帰国している北朝鮮の話題は極力避けておられたが、もう時効だしひとつだけ紹介しておこう。「朝鮮大学校の時の彼女に、向こうでは手に入らない菓を今も送り続けてる」との美談。先生は祖国愛と異性愛に満ち溢れた真のコミュニストであった。先生の労作『朴泳孝伝』が早く出版されることを、切に望みたい。

最後になりましたが、金慶海先生のご冥福をお祈りいたします。合掌。

第 280 回朝鮮近現代史研究会報告 (2011. 4. 10)

2010 年「韓国・朝鮮」に関する日本の新聞論説 —日本との関係・「歴史問題」を中心に—

梶居佳広

2010 年は、韓国併合から 100 年、朝鮮戦争勃発から 60 年という節目の年であったが、日本の新聞は日本と朝鮮半島の歴史・現状をどう認識し論じていたか。本報告は日本で発行されている日刊紙の社説・論説を調査した。以下、明らかになったことを記したい。



1. 韓国併合 100 年は、菅首相談話 (8 月 10 日) から「22 日」「29 日」にかけて過半数の新聞が社説で取り上げ、2 月の岡田外相訪韓や 3 月の日韓歴史共同研究報告発表においても多くの新聞が反応している。一方、朝鮮戦争 60 年を社説で取り上げたのはひとけたに止まった。ただし戦争に関連しての朝鮮半島情勢は、哨戒艦事件 (3 月) や砲撃事件 (11 月)、北朝鮮の世襲など数多くの新聞が社説で取り上げている (なお国際問題を社説で論じることの困難な地方紙の幾つかは共同通信配信を社説・論説として転載していた)。

2. 全体の論調は、9 条改憲に傾斜し韓国・朝鮮への偏見も散見された朝鮮戦争の頃と比べると、より冷静なものであったといえる。「併合 100 年」については菅首相談話をどう評価するかがポイントとなったが、『産経』『北國』を除いて植民地支配を「負の歴史」と把握している。この点、『神戸』『南日本』は併合過程における日本側の強制をより強調する立場から首相談話は不十分との認識を示し、また『高知』『琉球新報』などは詳細な歴史叙述を披歴しつつ日本の加害を強調するなど、一部地方紙はより踏み込んだ見解を提示していた。朝鮮半島の現状についても、最も緊迫した砲撃事件において、6 カ国協議など外交による事態收拾を求める比較的穏健な見解が大半であった

3. 勿論、(朝鮮戦争時と同様) 特に北朝鮮の行動が論調に変化・影響を与えた面も否定できない。例えば、朝鮮学校を高校無償化の対象から除外するか否かについて、砲撃事件を境に除外やむなしとの見解を示す地方紙が目立つようになり、(9 月の尖閣諸島における中国漁船事件もあって)「日米同盟」強化が当然視されるとともに日韓の軍事的協力関係の「深化」について沖縄の新聞を除いて従来みられた警戒心が薄まるようになった。この点、普段から第 9 条など日本国憲法改定を主張する新聞＝『読売』『産経』『日経』『北國』は朝鮮問題を取り上げつつ実際は国内の有事体制に関する自説を主張する社説を掲載していた。

4. 以上、2010 年の日本の新聞論説を概観すると、(1)併合・植民地支配という歴史問題は (首相談話もそうであったように) 韓国を対象を限定し、(2)朝鮮半島の現状については (朝鮮戦争に関する全国紙社説が事実上北朝鮮批判であったように) 北朝鮮の問題と把握しているのが特徴であり問題でもあったといえる。「過去の問題」について北朝鮮を除外する状況への疑問を『信濃毎日』『中国』などが指摘しているものの少数意見に過ぎない。北朝鮮が抱える問題＝「北朝鮮からの脅威」を指摘する点は敏感かつ的確であるが、韓国・アメリカ側、そして基地を抱え日米軍事同盟に傾斜する日本側の持つ問題＝「北朝鮮への

脅威」には無自覚であった。加えて、普段「リベラル」な論調とされる新聞が（それだからこそかもしれないが）北朝鮮に強硬な主張を展開したこと、また「過去」を反省し韓国との友好を重視する新聞の多くが一定の留保をつけつつも韓国との軍事協力の進展を「過去」との訣別、「未来志向」の一例と認識するようになったということは、今後の新聞論調をみる上で注目すべき傾向といえよう。扇動的な論調は少数に止まった一方、これまでの歩みや現状を既成事実として容認する傾向が強まったこともまた否定できないのであった。

●青丘文庫研究会のご案内●

■第326回在日朝鮮人運動史研究会関西部会

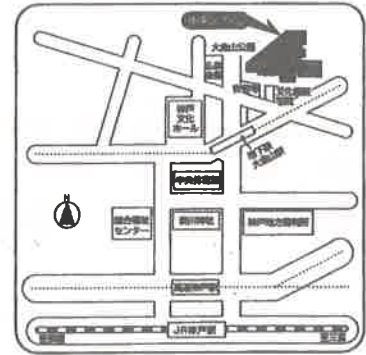
6月12日（日）午後1時～5時

①「兵庫県香美町余部の曹鉄根の墓について」太田修

②「戦前期の鶴橋署と朝鮮人—ゴム工労働者の7回のゼネスト計画をめぐる闘争を中心に—」塚崎昌之

■朝鮮近現代史研究会はお休みです。

※会場 神戸市立中央図書館内 青丘文庫 TEL 078-371-3351



強制動員真相究明ネットワーク・研究集会・資料集（A4、88頁）を販売します。

代金 560円/送料 80円/合計 640円

※購入希望者は、80円切手8枚（640円分）を下記までお送りください。

〒657-0064 神戸市灘区山田町3-1-1 神戸学生青年センター内 真相究明ネット事務局

<資料集目次>

1)「朝鮮農村からの強制連行」 樋口雄一

2)「戦時体制期韓半島内人的動員（労務動員）被害～死亡者現況を中心として～」

鄭惠瓊（韓国・日帝強制動員&平和研究会会創立準備委員、歴史学博士）

3)「鉄鋼統制会の名簿（1945.8.15）から」 塚崎昌之

4)「被朝鮮人連行者の賃金問題」 守屋敬彦

5)「総動員計画と強制連行」 庵谷由香

6)「2011年検定 中学校歴史教科書 記述比較」上杉聡

7)「朝鮮人軍人軍属名簿からみた朝鮮人動員の状況」竹内康人

【今後の研究会の予定】

2011年7月10日（日）、在日（高野昭雄）、近現代史（未定）、8月はお休み、9月11日（日）在日（玄善允）、近現代史（未定）。研究会は基本的に毎月第2日曜日午後1～5時に開きます。報告希望者は、飛田または水野までご連絡ください。

【月報の巻頭エッセイの予定】

7月号以降は、砂上昌一、高野昭雄、全淑美、塚崎昌之、玄善允。よろしくお願いします。締め切りは前月の10日です。

【編集後記】

8月の初めにソウルで在日朝鮮人運動史研究会と韓日民族問題学会（韓国）が共催で「韓-日合同学術セミナーおよび開港地探訪」が開催されます。テーマは、「戦後日本の市民運動を通してみる日韓関係と在日朝鮮人」です。日程が最終決定していませんが、ご参加をよろしくお願いします。（飛田 hida@ksyc.jp）